

昭和66年2月1日第3種郵便物認可
平成17年7月1日発行（毎月1回1日発行）
俳句雑誌「沖」第36巻第7号



俳句雑誌[おき]

7月号

沖 発行所

万緑裡

林 翔

女流俳句

同人作品の選をしていて、いつも女性優位なのを感じていたが、今月は特に、真珠抄の上位八名が皆女性であった。

明治時代など、句会は殆ど男性だけで、女性は屏風の陰に身を隠してそつと句稿を屏風の脇から出すのだったと、何かで読んだことがある。

試みに昭和四年改造社発行の『現代短歌・俳句集』を披くと、短歌の方は女性が二十一名入っているのに俳句の方は、本田あふひ・久保より江・杉田久女・長谷川かな女の四名だけ。昭和二十九年角川書店発行の『昭和俳句集』では阿部みどり女・石橋秀野・及川貞・桂信子・加藤千世子・高橋淡路女・竹下しづの女・中村汀女・野澤節子・橋本多佳子・星野立子・細見綾子・三橋鷹女・山口波津女・渡邊桂子の十五名にふえたが、全体の一割強に過ぎない。

その頃とは文字通り隔世の感がある

鎌倉大仏

大仏は伏目に在すを松の芯

長谷観音

御像仰ぎやがて掌合はせ春と思ふ

長谷寺

夜叉神に搏たるもよし春闌けて

肩が行く首が行くああ万緑裡

覚えぬし佳き名よ都忘れなる

実梅落つ昨日は数へ今日無数

ことづてを残り手を振る夕薄暑

朝湯にて足らず万緑浴びにゆく

雲も満ち俳語も満てり登四郎忌

茫然の時忙の時朴花忌

るのだが、以下、私が初学時代に愛読した『汀女句集』から若干抽いてみよう。

屠蘇注ぐや快の際に炭火赤し

縫始今暖めて来し手かな

新涼の手拭浮けぬ洗面器

とどまればあたりになゆる蜻蛉かな

たんぼぼや日はいつまでも大空に

中空にとまらんとする落花かな

せきとめし巡査と濡るる花の雨

おいて来し子ほどに遠き蟬のあり

稲妻のゆたかなる夜も寝べきころ

秋雨の瓦斯が飛びつく燐寸かな

ゆで玉子むけばかがやく花曇

あはれ子の夜寒の床の引けば寄る

林 翔



隠れ道

能村 研三

九十九里の前田普羅

鎌倉

まじ吹いて扇ヶ谷やつの隠れ道

長軀なる大宗匠の夏点前

青葉光尾立ての栗鼠の屋根渡り

光背に雲形片や薄暑光

千葉県人は、昔から氣候が温暖で、米や農作物がよく採れた所であったため、気質はおおらかでハングリー精神に欠けており、齒を食いしばつて世に出るような人がいないところと言われていた。千葉県が生んだ三大偉人と言えば、日蓮、伊能忠敬、長嶋茂雄の名がすぐに出てくるほどで、他の名が浮かばない。

最近、妻の母が一人で房州の岬町に住んでいるので何カ月かに一度車で訪ねることにしているが、その道すがら、県内でもまだ行ったことのない所を訪ね歩いてゐる。

つい先日、九十九里にある白子町の玄德寺を訪ねた。日蓮の開基の大きな寺で、山門を入ると右側に広い墓域、大木が茂り古寺の趣が漂う。この寺は俳人前田普羅の菩提寺で知られ、俳句とのかかわりも深かったようだ。明治初期に当地の人たちによつて建てられた芭蕉の句碑もある。

普羅の墓碑には、蛇笏の書による墓碑名が記されていて、町指定の文化財にもなっている。白子町の解説によれば、前田普羅は明治十八年白子町に生まれ、早大中退後、横浜裁

協道の谷戸の岩窪滴れり

真間・国府台

風格の砂洲の黒松風薫る

料亭は軍都のなごり花は葉に

木漏れ日に地縁を綴る文学碑

高みにて鷹アカシアの吹かれぶり

雄渾の寺の扁額青葉風

判所に勤めながら俳句を作り始めたという。(俳句辞典によれば東京の生まれとある。)

また、国民宿舎「白子荘」の前には、向日葵の月に遊ぶや漁師達

という句碑が建っている。普羅は、後に高浜虚子門下四天王と呼ばれた人であるが、大正初期に九十九里浜で詠んだ句。ここは昔から鱒漁の盛んな土地で、明治以後、二隻の船が沖合いで鰯網を巻く揚繰(あぐり)網が取り入れられたが、砂浜に漁船を出し入れするのに多くの人力を要した。集落をあげて船を押し出す仕事を九十九里の方言では「おっぺし」と言い、戦後まで続いたという。見渡すかぎりの砂浜と海にかかる月、そしてそこに向日葵と漁師達を登場させることで力強い抒情を生んだ。普羅といえば山岳俳句を得意とした富山県の俳人と思っていたが、身近な千葉県ゆかりの俳人と聞いてなお親しみが湧いてきた。

能村研三

蒼茫集



天に吊る 辻 美奈子

葉桜の枝垂みどりを天に吊る
屑金魚水を元気にしてみたり
をさなごに聞あたらしき蚩かな
くちなはの消息草の音を聞く
川風に土よく匂ふ蝮蛇草
麦飯をいただく臍の位置ととのへ

やうやくに 千田 百里

五月来る家居に夫のシャツを着て
やうやくに山車まで届き牽く力
咲きながら虚空を探る藤の蔓
売卜の灯に列なせる街薄暑
花桐は遠で眺めむ仮の世も
何と読む一筆描きの螢火を

袋掛け 坂本京子

袋掛け枇杷も個室の欲しきころ
伴走の花びらいくつ花筏
濯ぎたき身のうち春の月あかり
木の芽和苦みほるほる齡とは
八十八夜肩を宥むるもの羽織り
張り終へし水田に雲の茜いろ

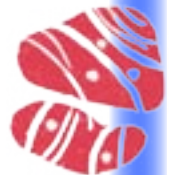
朴 一花 望月晴美

ありあまる春光句碑に生徒らに
いつまでの喪ごころよ山笑へるに
逃水の逃げきりしとき日の暮るる
目覚めをり春逝く胸に掌を重ね
母の日や亡母の小袋握りしめ

鳩亭に咲き

朴一花「沖」のグラビア飾りたる

潮鳴集



人の旬

中島あきら

初つばめ子育てどきは人の旬
大魚周遊春昼を刮目し
八方に根の熱からむ花の闇
花屑のもう一度舞ふ浮力かな
ベランダの風鮮らしき鯉幟

春惜しむ

長谷川千枝子

竹皮を脱ぐやしばらく撫で肩に
大きいとは言ふまい父の日の帽子
病み犬の耳そばだつる薄暑かな
ほととぎす真似てもつる舌の先
錠剤の赤や黄色や春惜しむ

少 年 宮坂恒子

背伸びして少年育つ聖五月
息触るることも畏るる白牡丹

噴水の爪先立ちにふと不安
滝音にたましひ軽むまで打たる
青嶺ある安堵に今日の畑仕事

啄木の砂

大庭三千枝

鳴く亀を探して池を巡るかな
切り返す風も茶どころ初燕
白牡丹衰微は内にひそみをり
人よりも星に親しき花辛夷
啄木の砂キュッキュッと鳴かせ夏

風の切り口

渡部節郎

風車風の切り口見せてをり
使ひ切る洗濯挟み麦の秋
夏嶺へと百貨店より発つ電車
初つばめ湊町から浜町へ
蒼穹に螺鈿はめ込む紫木蓮

沖作品



能村研三選

花吹雪浴ぶ溺れむと励まむと

東京

工藤 進

バチカンの大き星消ゆ花ミモザ
端午かなぶだう畑にシャツ干して
愛鳥日ヘッドホンより音洩れて
リビングに不夜城ありぬ熱帯魚
種を蒔く土踏まぬやう土を踏み

千葉

林 昭太郎

巻尺に巻取る春の重さかな
永き日や鉢のかたち鉢の土
蝌蚪の影蝌蚪より多いかも知れぬ
一心に空暮れてゆく花水木
夕月のまだ稚くて遍路笠
見上げたる桜わたしとおない齡
砂利道は昭和の音や桜散る
夢のままもらうてきたり蝌蚪の紐
両翼を張りて巨木や進級す
飛花落花風にさざなみ生まれけり

東京

坂 ようこ

中尾 公彦

吹き寄せの水のかたちに花笈
眼帯の中のまばたき蝶の昼
惑星の配置につきし聖五月
花蜜柑月にあをめる蕊匂ふ
自転車のかごにバイエル五月来る
落花飛花掌に受け絹の肌ざはり
花ふぶき誰が指揮棒を振りふるや

市川市

栗原 公子

夜の落花絹ひく雨となりにけり
角乘にひやひや憲法記念の日
ひしめきて空を貫へぬ鯉幟
音読に脳いきいきと青葉山
浮雲は木綿のにほひ更衣
さはがしきこの世を覗く夏蕨
朧夜のわたくし増ゆる三面鏡
山鳩の足のももいろ若葉冷
おしおきの物置古び柿若葉

大分

河野美千代

千葉

伊藤 小雪

蒲公英の絮終幕のバレリーナ
ベーコンをかりつと連翹明りかな
花種蒔くきつと退院するやうに
鳥声の高みたかみへ梨の花
モナリザの尽きぬほほゑみ鳥雲に
土牢は闇の固まり山ざくら
紫木蓮風が一服してゐたる
春光を重ねて紙の漉かれけり
夏霞灯台白く切り絵めく
花の寺鶯張りのよく鳴きて
帰路に又しかと見納む滝桜
リラ冷えや一枚弱とふベストよき
新社員せめてネクタイてふ個性
風光る屋根の反りよき御涼亭
師の句碑に花は造化のシャンデリア
縁起などまはし読みして桜餅
浅蜷搔き縄文びとの話など
花冷や皿のカステラ凭れあひ
風紋や浜豌豆のあそび蔓
花万朶一直線のケーブルカー
雛囀栗やカスターネットの指づかひ
一本のひかり曳きずり畦を塗る
ひと吹きをして子に渡す風車
逝く春の石斧に浮きし握り艶
樽酒を浴びて駆け出す祭足袋

市川市

代田 幸子

東京

七種 年男

千葉

柳川 紀子

市川市

宮島 宏子

東京

菊地 光子

千葉

鈴掛 穂

手に重し八十八夜の花缺
麦秋や櫓音を遠く野菊の碑
観光船の水脈太々と夏立てり
青嵐地図にはのらぬ岬道
六甲の稜線溶けて夏霞
美馬みまてふ村落ありぬ夏薊
へッドライブへっドライブ五月の真闇引き裂いて
夏初め水中翼船風となり
恋成るとあり八十歳の初みくじ
父の世の盃洗に盛る花菜和

新潟

長谷川 春

峰 幸子

愛媛

十亀 弘史

新人賞予選句（七月）

花吹雪浴ぶ濡れむと励まむと
巻尺に巻取る春の重さかな
砂利道は昭和の音や桜散る
眼帯の中のまばたき蝶の昼
角乗にひやひや憲法記念の日
浮雲は木綿のにほひ更衣
蒲公英の絮終幕のバレリーナ
ベーコンをかりつと連翹明りかな
土牢は闇の固まり山ざくら
リラ冷えや一枚弱とふベストよき

工藤 進

林 昭太郎

坂 ようこ

中尾 公彦

栗原公子

河野美千代

伊藤小雪

代田 幸子

七種 年男

柳川 紀子

沖作品 選後句評

*
能村研三

花吹雪浴ぶ溺れむと励まむと 工藤 進

昔から桜の花は散りぎわが美しいと言われてきた。落花の真っ只中に身を置くと不思議な気持ちになる。四月に行われた東京例会の吟行で行った新宿御苑の花吹雪は見事であった。この句もその時に経験した感慨を詠んだものかも知れない。句はリフレインのかたちをとっていて、「と」という助詞で展開を図りながら、自らの気持ちを昂揚させている。一瞬は花吹雪に溺れかけてしまったのだが、はっと吾に帰るとこの自然の恩恵を自らのエネルギーに変換させようと思ったのだ。いつまでも情緒に溺れたままにするのではなく、それをプラス指向にしようとする作者の前向きな姿勢がうかがえる。「リビングに不夜城ありぬ熱帯魚」の句、熱帯魚の水槽は常に蛍光灯などの明りを灯しつづけているが、あれは水草に光合成を促すためなのかも知れない。いずれにしても、寝静まった家の中であってリビングの中で煌々と明りが点いているさまはまさに、小夜城そのもので、面白いところに気がついた。

巻尺に巻取る春の重さかな 林 昭太郎

巻尺はいままでにも何句か詠まれていたが、この句も実際の経験がないと詠めない句である。春の重さというのは、アンニュイな春といった心象的に感じる部分と解釈するのが妥当と思えるが、この巻尺はこまごましたものを計るコンベックスとは違って、五十メートルくらいあるものと解釈したい。雪も解けて春になると一齐に普請が始まる。建築や土木工事にかかせないのが巻尺で、外で使うものであるから雪解けの水や春泥も巻尺には絡まってくるし、芽を出したばかりの春の草々も絡みついているかも知れない。重さを作った物理的な要因となったものは全て春を待ちこがれていたものばかりである。「永き日や鉢のかたちに鉢の土」の句、鉢の植え替えの時の句であろうか、何年か前に鉢に入れた土がやや乾燥しきって鉢のかたちそのままに外へ出された何でもないところにも発見がある。

砂利道は昭和の音や桜散る 坂 ようこ

現在はアスファルト舗装が急速に普及し、田舎の農道のような道路までがきれいに舗装され、快適な車の走行ができるようになった。昭和四十年代ころまでは、ちよつと郊外に行くと、砂利を引き詰めたガタガタ道で、砂利道は時間が経つと飛び散って穴があいた状態になり、大きな水たまりができたりもする。当然車が通るたびに石があたりガタガタと振動する。昔から慣れ親しんだ桜並木の道で花見を楽しみながら、今になっては昭和の時代の音を懐かしんだ。「両翼を張りて巨木や進級す」の句、子供たちの成長を見守る校庭の大きな木、両側に翼を張ったような枝ぶりが子供たちを暖かく見守っている。(以下略)